文楽座命名 150 年

人形浄瑠璃「文楽座」の歩み

歴史とゆかりの地めぐり

錦絵「松嶋廓大芝居人形芝居繁栄図」（大阪府立中之島図書館蔵）

一般社団法人「人形浄瑠璃文楽座」発行

「ご挨拶」

私どもが演じている「人形浄瑠璃」は能楽・歌舞伎と並ぶ、日本が誇る古典芸能の一つですが、その「人形浄瑠璃」の中に有って、代表的な劇団が私ども「人形浄瑠璃文楽座」です。

江戸時代の貞享元年（1684）に竹本義太夫が旗揚げした「竹本座」、その弟子豊竹若太夫が元禄１６年（1703）に始めた「豊竹座」両座の流れを汲む歴史ある劇団です。

こんにち国の重要無形文化財に指定されている「人形浄瑠璃文楽」は文化庁の指定要件に「人形浄瑠璃文楽座の座員により演ぜられるものであること」とあり、この「人形浄瑠璃文楽」と「文楽座」の名前の由来は、数代にわたり人形浄瑠璃の劇団を経営した植村家の元祖、正井与兵衛の素人浄瑠璃語りとしての芸名「文楽」によります。

そしてその子孫（文楽翁）が大阪の松島に劇場を建て、柿落とし興行の番付に初めて「文楽座」の文字が載ってより、本年はちょうど 150 年に当たります。

その事を記念して、創始者正井与兵衛（初代文楽軒）をはじめ、100 年近くにわたり劇団を経営した植村家の代々を顕彰するために、「文楽座命名 150 年」と銘打ち、さまざまな催しを開催いたしております。その一つとして、「植村家の代々」や「文楽座ゆかりの地マップ」を紹介する、この冊子を作成いたしました。

文楽座の歴史を振り返ってみますと、文楽座が伝統を守りながら今日まで興行を続けて来ることができましたのも、初代文楽軒に始まる植村家、それを引き継いだ松竹、国による保護を始め、大阪府市と NHK の協力により設立された文楽協会、そして東京国立劇場・大阪国立文楽劇場（日本芸術文化振興会）など、様々な関係各位のご尽力の賜物と、感謝の念に堪えません。これからも、私ども文楽座が受け継いで来た人形浄瑠璃という芸能を、発展継承していけますよう努力して参る所存でございますので、皆様のご支援とご鞭撻の程を、伏してお願い申し上げます。

令和４年　　人形浄瑠璃文楽座

・文楽について

「文楽」と言えば、能楽・歌舞伎などと並べて、演劇のジャンル名として、こんにちでは用いられることも少なくないが、元々は文楽座の座主（ざぬし）・植村家元祖正井与兵衛の素人浄瑠璃語りとしての号「文楽」がその由来である。後に文楽座が、竹本座に始まる大阪系の人形浄瑠璃を代表する唯一の劇団となったため、中にはどの人形芝居も文楽だと思っている方さえあるが、文楽＝人形浄瑠璃ではない。

日本各地に「〇〇文楽」と「文楽」の文字を冠した人形芝居があるが、これらは言わば文楽座に対するオマージュから名付けられたもので、ほとんどの団体が文楽座とは直接には関係がない。つまりさまざまな人形浄瑠璃の中の一つが「文楽」であり、義太夫節と三人遣いの人形を用いたものの中で代表的な劇団が私ども「人形浄瑠璃文楽座」である。

義太夫節による人形芝居は、竹本義太夫が大坂道頓堀に創始した「竹本座」、その弟子豊竹若太夫が始めた「豊竹座」の両座が競い合い、全盛期を迎えたのち、さまざまな事情により両座とも道頓堀を離れて大坂各地でその後継者達が興行を続けた。それらの興行の中には寺社の境内で行われた「宮地芝居」と呼ばれるものがあった。道頓堀の劇場は常設で幕府公認であるのに対して、宮地芝居は名目上は仮設建築（小屋掛け）で官許を受けていないものであった。そのさまざまな後継劇団の中で、途切れる事なく常打ちで興行を続けていたのが、正井与兵衛が経営を始めた劇団である。

与兵衛が淡路島から大坂に出て来たので、「文楽の始まりは淡路」といった誤った説も見受けられるが、先にも述べたように、与兵衛が経営したのは道頓堀で創始された、竹本・豊竹両座の流れを汲む演者を集めた劇団である。この劇団は与兵衛の没後、明治末に「松竹」に経営を譲るまで 100 年余りの間、天保の改革による宮地芝居の禁止などの影響を受け、移転しながらも、その一族の代々により、経営が続けられた。

・初代文楽軒について

初代文楽軒こと正井与兵衛については、名前も出身地も諸説あり、良く分からないところが多い。与兵衛は淡路の生まれ（阿波の生まれとも）で、姓も柾木で名前も嘉兵衛であるとか、道具屋大蔵であるとか諸説がある。

また正井与兵衛は一般に、「初代植村文楽軒」と呼ばれているが、正井家が戸籍上の姓を植村と改姓したのは、明治になってからであり、与兵衛は植村姓を名乗っていないという説がある。一方、与兵衛が淡路から大坂に出て植村と称していたとの説もある。「植村」姓は淡路人形浄瑠璃の座本「上村」に因むといわれており、それならば座主名として「植村文楽軒」と名乗っていたとも考えられる。

「文楽軒」の号も、本人が生前に名乗っていたという証拠は今のところない。〇〇軒というのは「斎号」などと同じく「軒号」と呼ばれ文人や芸人の雅号であり、浄瑠璃語りなども用いている（古くは初代竹本政太夫の素人の門弟に順四軒、竹本大和掾の有隣軒など）。しかし、遺族に伝わった与兵衛の肖像画の掛軸（妻てるの存命中に描かれたもの）の賛には「文楽軒が画讃」とあり、いくら後継者が「文楽軒」を名乗ったからと言って、与兵衛本人が名乗ったこともない「軒付きの名前」を付けたり、画讃に記したりするであろうか、甚だ疑問である。大阪円成院にある「文楽翁之碑」の碑文には、元祖の名前は「嘉兵衛」であるとし、「幼い時より浄瑠璃をよく語り、【十三歳で文楽軒と号し】諸国を廻り、中国筋の諸大名に招かれ浄瑠璃を語り名声を博した」と書かれている。これらからも、やはり本人が生前のある時期に名乗っていたものとは考えられないだろうか。その肖像は義太夫節の見台に向かって座している画であることから、素人浄瑠璃の語り手であったことは疑いないと思われる。いずれにせよ、子孫達により書かれたこれらの掛軸の箱書き等は全て「先祖文楽軒」や「祖父文楽軒」となっており、妻のてるが淡路島に建立した墓も、基壇に「文楽軒」の文字が彫られている。与兵衛は子孫から初代「文楽軒」と呼ばれていたことだけは確かといえよう。

与兵衛が淡路から大坂へ出てきたのは諸書によると、寛政（1789-1801）の頃（正確な時期は不明）とある。

この時期の大坂における素人義太夫の語り手として、天明８年（1788）「浪花素人浄瑠璃見立角力」に「舟場　文樂」、 享和２年（1802）の「浪花なまり」という書物にも「文樂」という名が掲載されている。 また、素人による興行とみられる、寛政５年３月・北の新地芝居におけるものに「文樂」、寛政１２年５月・道頓堀大西芝居の興行（人形入り）の番付には、【竹本「文樂」太夫】なる玄人の芸名を模したと思われる名があるが、これらと初代与兵衛との関係は不明である。

なお、「増補浄瑠璃大系図」［四代目竹本長門（長登）太夫編著］によると、四代目竹本染太夫（1756-1823）の門人「竹本木々太夫」の項に、【通称文樂与兵衛と云也】とあり何らかの関係がうかがわれるが、続く文中に【事実は奥へ出す】とありながらその説明はなく、年代的なものも含めてこれが誰の事を指しているのかは、これもまた不明と言わざるを得ない。 新出資料の公開等、後考を俟ちたい。

また、尾道の海龍寺にも現地の門弟が建てた元祖の墓があり、尾道で浄瑠璃を教えていた等の事績が伝えられていて、中国地方に何らかの関わりがあったと思われる。彼の墓は円成院の他、上記の尾道・海龍寺、淡路島・勝福寺にもある。

文楽座　座紋

・文楽軒という名称について

従来、歴代の座主の名前は、「〇代目文楽軒」とされてきた（植村家の子孫の伝承では代々、文楽軒と称したと伝わる）が、座主としての代数と、「文楽軒」の名乗りの代数は分けて考えるのが適切なように思われる。

座主としての代数は、植村家の過去帳などによると、初代（文楽・正井与兵衛・嘉兵衛）、二代（浄楽・嘉兵衛）、三代（信楽・嘉兵衛）、四代（正井大蔵）、五代（植村大助）、六代（植村泰蔵）となっている。この中で、確実に「文楽軒」と名乗っていたことが、資料等で確認できるのは、大蔵、大助であり、二代目座主の浄楽と（植村家旧蔵の蔵書の中に、いくつかの反古書きが残されており、養父の雅号を継いで「文楽軒」を名乗っていた時期があるとされるが）、三代目座主の信楽についてはよく分からない。

まず、二代目座主の浄楽であるが、この人は初代の妻てるの甥で、名を貞藏、初代の養子となりのちに嘉兵衛と名乗ったと伝わる。泰蔵の子息・植村定治郎氏所持の植村家の過去帳によるという系図には釋浄楽との戒名が記されている（兄妹の植村幸子氏所持の過去帳には【証楽】とあるという。大蔵が建立した初代の墓石には【浄楽】翁とあり、大助が長久寺に建立した墓石には釋【證楽】とある）。いずれにしても、円成院の初代の墓石の碑文や文楽翁之碑の碑文に、初代の後継者として名が書かれており、二代目座主であったことは間違いないと思われる。問題となるのは、三代目座主となったと伝わる信楽だが、この人物は【初代の妻てるの兄弟の娘の甥にあたる清六】とされており、植村家の過去帳には命日も記してあるので実在したのは確かと思われるが、碑文などの他の資料には登場せず（文楽翁之碑の背面に、植村累代として、三代文楽軒・法名釋信楽居士と名は記されているが）、二代目浄楽の次の代は大蔵となっている。植村家の系図としては、与兵衛→嘉兵衛（養子）→大蔵（実子・養子とも）→大助（実子）→泰蔵（実子）と連なる。これは大助が与兵衛のことを、初代の直筆の歌の掛軸の箱書きに【大祖父文楽軒】、大蔵が【祖父文楽軒】と記し、また彼が建立した円成院の初代の墓石に【祖父】と記したことに符合する。

なお、大蔵は自身も「文楽軒」を名乗り、明治になると姓を正井から植村に改め、のちに「文楽翁・楽翁」、号を人竜と称した。その子、大助はこれも「文楽軒」を名乗り、号を霞亭・暢春堂と称した。

・初代文楽軒夫妻の墓と文楽翁之碑

文化７年（1810）７月９日に 60 歳で死去した初代文楽軒は大阪下寺町の円成院（遊行寺）に葬られている。円成院は時宗遊行派の寺院で、正式名を仏智山円成院遊行寺といい、鎌倉時代後期に一遍上人が四天王寺を参詣した時に構えた庵の跡地という。延享元年（1744）に遊行第五十一代他阿賦存が寺を建立した。

この寺の墓石は初代文楽軒の養子の【浄楽】が建てたものを、天保１４年（1843）秋に孫の【文楽軒・文楽翁、正井大蔵】によって改葬されたもので、墓石には釋樂道（文楽軒）、釋妙教（妻てる）、台石には「正井氏」と刻まれている。墓石の裏面には文楽翁（大蔵）により碑文が書かれている。

なお、初代文楽軒の墓としては他にも、尾道の海龍寺と淡路島の勝福寺に供養塔がある。

他に境内には明治２２年（1889）12 月に文楽翁（大蔵）の子の植村大助が建立した、文楽翁の遺髪を納めた「文楽翁之碑」という巨大な石碑がある。各碑文は別途資料篇（22，２３ページ）に記載する。また、文楽翁の墓は、谷町の長久寺にある。

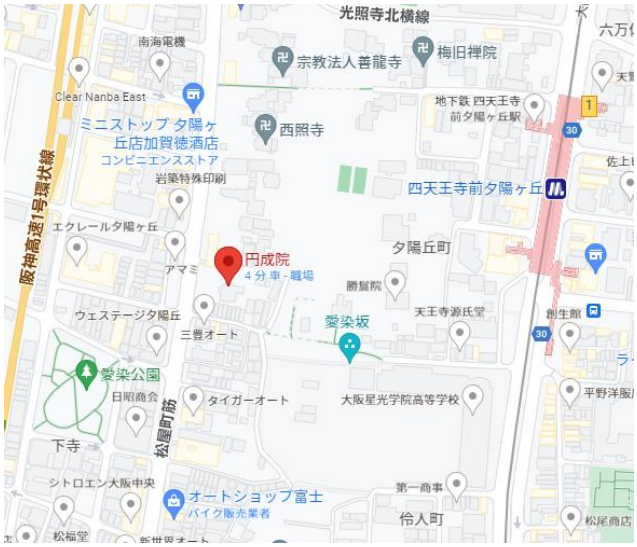
その他、当寺境内には義太夫節関係者の墓石が数多く保存されている。

竹本染太夫（初代・４代・５代・６代）、竹本梶太夫（２代）、竹本咲太夫（３代・６代）、竹本住太夫（３代）、竹本内匠太夫（５代）、竹本長尾太夫（２代）、竹本政太夫（５代）、竹本播磨大掾、竹本筆太夫（３代）、竹本彌太夫（４代）、竹本君太夫、竹本葉太夫、豊竹靱太夫（初代）、豊竹駒太夫（３代）、豊竹巴太夫（初代・２代）、豊竹中太夫（３代）、豊竹八重太夫（３代）、豊竹若太夫（４代）、鶴澤叶（２代）、鶴澤清七（３代）、鶴澤文蔵（３代）、豊澤廣助（初代・３代）など。

他にも、芭蕉の墓、歌舞伎役者、関取など近世の芸能関係者の墓が多数存在する。これについて六代目染太夫はその日記の中に、「下寺町より天王寺への道筋は（中略）遊行寺の寺内を切り割り、四天王寺への道をしつらひしより、今に至りてもこの寺内を通り道と心得し者ばかりにして（中略）諸人行き通ひをさせる繁昌の地中にて、なほ四天王寺の道筋なれば、浪花諸芸者の石碑を建てるはこの寺内に極まりしとあって、浄るり太夫、三味線弾き、歌舞妓役者、力者等の石碑うはが上に建てつまりて幾数をしれず」と記している。

現在この寺の門前は突き当たりではないが、それは明治３６年に第五回内国勧業博覧会が行われたため、その通路として切り開かれたからで、それ以前は、松屋町筋はここで行き止まりであった。昔はこの寺の門前に石敢當（いしがんどう）があり、それには「天王寺清水寺ちかみちぬけとほり遊行寺」と書かれていたそうである。

円成院正面　　初代文楽軒夫妻の墓　　文楽翁之碑（正面、側面）



引用元：Google 社「Google マップ、Google Earth」
https://www.google.com/intl/ja/permissions/geoguidelines/

＊長久寺の植村家の墓

大阪市谷町８丁目にある、日蓮宗大圓山長久寺は、天正７年（1579）に中正院日長上人により開山。天正１７年には豊臣秀頼の武運長久を祈るため淀君の命で、大坂城築城の余材をもって本堂が建立されたと伝わる。その後、戦前・戦後の数度にわたる道路拡張・都市計画により、境内の大半が縮小されたため、本堂・大門・帝釈堂・庫裡等は奈良・薬師寺に移され、旧本堂は現在、慈恩殿として活用されている。墓地には、五代目座主の植村大助が建立した釋證楽（二代目座主浄楽のことか）と大助の妹「釋妙〇〔人偏に宣の文字〕」の墓、四代目座主

の正井（植村）大蔵（釋眞教）とその妻しか（釋貞教）の墓、そして六代目座主の植村泰蔵（泰然院文靜日章信士）とその妻しな（品節院妙貞日勤信女）の墓が並んで立っている。

歴代座主の中で特に傑出した人物が、二代目座主の浄楽の子（養子とも）の四代目座主の大蔵（文楽軒・文楽翁・楽翁）で、幕末から明治維新の混乱期によく危機を乗り越え、文楽座を発展させた。彼は小屋を稲荷東門から松島、御霊神社内へ次々と移転させるなど、時流を達見する経営の才、芸人を操縦統御した人徳、これらを完備した優れた興行師であった。人形を生かした新趣向を工夫するだけでなく、文筆も立ち新作改作を盛んに発表した。また、芝居経営だけでなく製薬商も営んだ。弘化・嘉永（1844～1854）頃の『買物獨案内』という書には、「延壽酒　本家謹醸所　文樂軒正井大蔵」とある。

ほかにも、竹本津太夫（３代・４代）、竹本緑太夫の墓、赤穂浪士の一人である原惣右衛門の墓がある。

植村家墓

四代目大蔵、妻しか墓

＊淡路島の初代文楽軒の墓

兵庫県淡路市仮屋にある、高野山真言宗・慶雲山勝福寺には、初代文楽軒の墓（供養塔）がある。この墓は初代文楽軒の妻てるが、夫の死より 10 年後の文化３年に建立したもの。

てるとその養子の「嘉兵衛」、そしててるの兄弟（兄か弟かは不明）である仲屋（中谷）辰右衛門が施主となり、淡路の仮屋・新浜に建立されたが、その後城原（じょばら）墓地内の中谷家の墓地に移動した。その後、阪神・淡路大震災の被害による墓地整理に際し、中谷家の菩提寺である仮屋の勝福寺に移設し保存されている。

大型の石造宝篋印塔で、塔身には梵字が彫られている。基壇正面、上段は「大坂　施主」下段には「文樂軒」、側面には「文政三庚辰年正月廿一日」「道具屋　嘉兵衛　同母　てる」と彫られている。（書籍等には「テル」と表記されていることが多いが、変体仮名で「てる」と書かれているので、この文中では「てる」の表記に統一した。）

ここで問題となるのは、「道具屋　嘉兵衛」なる人物だが、二代目座主である「浄楽・嘉兵衛」は、文政２年の６月１２日に亡くなっている。供養塔の建立は彼の死から半年後の文政３年であるが、（三代座主になったと伝わる「信楽」も「嘉兵衛」と名乗ったというが、彼は過去帳以外、他の資料に全く登場しないので）やはり「浄楽・嘉兵衛」が生前に、母てるとともに名を連ねて石塔を発注したと考えてよいのではないだろうか。

初代文楽軒墓（淡路島）慶雲山勝福寺

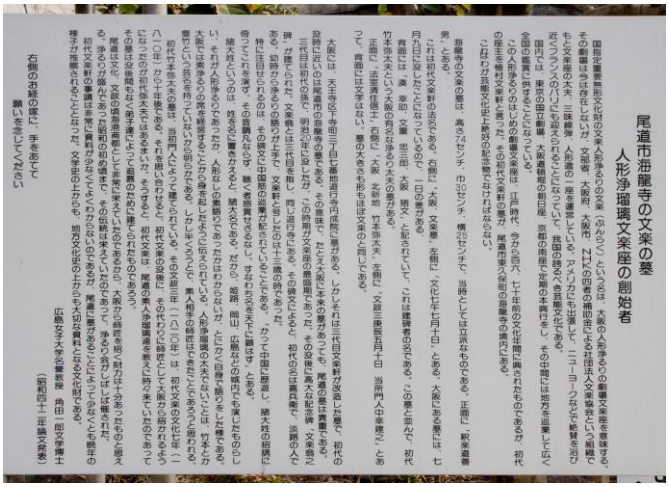
＊尾道の初代文楽軒の墓

広島県尾道市東久保町にある、真言宗泉涌寺派・転法輪山海龍寺には、尾道の門弟が建立したという、初代文楽軒の墓（供養塔）がある。

この墓石は、初代竹本彌太夫の墓石と並んで建てられており、二人は尾道へ浄瑠璃を教えに来ていたと伝えられている。没後、尾道の弟子達が供養塔を建て、二人の戒名を彫り追慕したという。

初代文楽軒の墓石は、正面に彼の戒名「釋樂道善男」、側面には「大坂　文樂墓」「文化七年七月十日」（なお、これは大阪の墓石や植村家の過去帳記載の命日より一日遅い）、背面には施主の連名が刻まれている。

初代文楽軒は、大阪円成院の「文楽翁之碑」にも「中国筋の諸大名に招かれ浄瑠璃を語り名声を博した」という内容が書かれており、この地方となんらかの関わりがあったと思われる。



尾道市海龍寺の文楽の墓
人形浄瑠璃文楽座の創始者

国指定重要無形文化財の文楽（ぶんらく）というのは、大阪の人形浄るりの劇場文楽座を意味する。その劇場は今は存在しないが、文部省、大阪府、大阪市、NHKの四者の助成による社団法人文楽協会という組織でも文楽座の大夫、三味線弾、人形遣の一座を運営している。アメリカにも出演し、ニューヨークなどへ絶賛を浴び近々フランスへ招かれることになっていて、我国の誇るべき芸能文化である。

国内では、東京の国立劇場、大阪厚生年金会館、京都の南座で定期の本興行をし、その中間には地方を巡業して広く全国の観賞に供することになっている。

この人形浄るりのはじめの劇場文楽座は、江戸時代、今から百八、七十年前の文化七年間に興されたものであるが、初代の座主植村文楽軒と言った、その初代文楽軒の墓が、尾道市東久保町の海龍寺の境内にある。

これはわが芸能文化史上貴重の記念物でなければならない。

海龍寺の文楽の墓は、高さ74センチ、巾30センチで、当時としては立派なものである。正面に「釋樂道善男」とある。

これは初代文楽軒の法名である。右側に「大坂　文樂墓　左側に「文化七年七月十日」とある。大阪に在る墓には「七月九日」に改じたことになっているので、一日の差がある。

背面には　発　幸助　文重　忠三郎　大阪　猪文、と記されていて、これは建碑者の名である。この墓と並んで、初代竹本弥太夫という大阪の有名な浄るりの大夫の墓がある。

正面に、法要清信信士、右側に、大阪　北新地　竹本弥太夫、左側に、「文政三庚辰年五月十日　当所門人中幸建之」とあって、背面には文字はない。墓の大きさも形もほぼ文楽のと同じである。

大阪には、天王寺区下寺町三丁目七番地浄瑠璃寺、天王寺区下寺町三丁目七番地浄瑠璃寺、天王寺区下寺町三丁目七番地浄瑠璃寺

＊初代文楽軒が開いた浄瑠璃稽古場

初代文楽軒が寛政（1789-1801）の頃、淡路から大坂に出て最初に開いたとされる「浄瑠璃の稽古場」は、現在の国立文楽劇場から程近い、高津橋南詰西の浜側に有ったと言われている。

のちにこの稽古場は、文楽軒が私財を投入して、人形入りの「高津新地の席」と呼ばれるものになったと伝えられているが、その浄瑠璃の稽古場がどんなものであったかや、この席でどんな人形を入れた興行が行われたかの資料は現在のところなく、よくわかっていない。

その後文化６年には芝居小屋が集まる「北堀江の市之側」 に小屋を移したとされる。

「浄瑠璃稽古場があった日本橋二丁目周辺」

＊北堀江の市之側の芝居小屋

初代文楽軒が文化６年に、高津から小屋を移転させた堀江は、四ツ橋からみて南西側の地域で、市之側はその北堀江にあり、長堀川の宇和島橋から二筋目と三筋目の間あたりが複数の芝居小屋があった場所といわれている。

文楽軒は、堀江に小屋を移したその翌文化７年に死去し（６０歳）下寺町の円成院(遊行寺）に葬られた。

「市之側の芝居小屋があった北堀江一丁目周辺」

＊いなりの芝居

初代文楽軒の没後は、子がなかったため、妻てるの甥の貞蔵が養子となり、二代目座主となった。彼はてるの庇護のもと、初代死去の翌文化８年に、博労町稲荷社（現、難波神社）境内に「いなりの芝居」とよばれる人形浄瑠璃の小屋を開いたが、文政２年（1819）６月１２日に３６歳で亡くなっている。

嘉永２年(1849)に発行された「嘉永二酉新版　日本二千年袖鑒　初篇拾七」という刷物（演劇界・主に人形浄瑠璃界に起こった重要な出来事が、嘉永２年の何年前に起こったかを記した事始め集のようなもの）に、この文化８年を「稲荷文楽芝居」と記しており、文楽の芝居の始まりと江戸時代から理解されていた事がわかる。その後、植村家の過去帳によると、てるの兄弟の娘の甥にあたる清六が養子となり三代目座主となったようであるが、確かでない。

文政１３年６月１６日にこの三代目が亡くなり、後を継いだ二代目の子（養子との説もあり）、正井大蔵（のち明治に植村姓に改姓、文楽翁・楽翁と称した）は文才や経営の才に富み、「いなりの芝居」を隆盛に導いた。

ところが天保の改革により、天保１３年に宮地芝居禁止令が出たため、社内より退去し、その後素浄瑠璃の興行で各地を転々とし（清水町西横堀浜などであるが現在のどのあたりになるか詳しい場所は不明）、苦難の経営を続けた。

安政３年（1856）には再び当地に戻り（人形入りの興行が復活するのは安政５年から）、その頃から「文楽軒の芝居」と呼ばれるようになった。（安政３年１０月の番付の挿絵に「文楽軒」が来場を乞う口上が隠されている。また、六代目染太夫の日記には「文楽芝居」「文楽の芝居」「文楽」、座主については「文楽」「文楽軒」と記されている。）

後に文楽座の紋下（櫓下）となった豊竹山城少掾は、この時の紋下であった三代目竹本長門太夫をもって、「文楽座トシテ座附櫓下の大夫とセシ第一ハ竹本長門太夫三代目ナリ」と記している。これらの事からこの時を、「劇団としての文楽座の始まり」と考えて良いのではないかと思われる。

いなりの芝居跡（難波神社）

＊松島文楽座

明治５年に大阪府の要請に応じ、九条の松島新地（大阪市西区松島千代崎橋）に劇場を新築し、「官許人形浄瑠璃文楽座」の看板を掲げたと伝えられている。また「文楽座」という呼称が初めて番付に出たのはこの時で、これについては『義太夫年表 明治篇』に

「明治四年に松島移転の建築工事を始めるや、新芝居では「文楽」で売出そうと考えた。九月の番付から文楽芝居の名を載せ、五年正月から文楽座と称した。関東では古くから座名を用いているが、関西では角の芝居や中の芝居等の如く「芝居」と呼ぶのが普通であった。これを関東流に座名に改めたのである。文楽翁の改革に対する熱意の一端がこんな処から出初めたのである。」

「番付には『御免文楽座」とわざわざ、「御免」の二字を頭書した。これは初演の時だけでそれ以後は姿を消すが、宮地芝居の助成櫓で興行して「御免」の二字に対する羨望を長年抱き続けた文楽翁にとっては、座名に頭書出来た喜びが如何に大きかったであろうか。」

「宮地芝居には何かと不自由な制約があった。建築も仮小屋が建前になっていたから、常設とは言え、櫓名代のようなわけにはいかなかった。松島文楽座ではその制限が除かれて、人形浄瑠璃のための理想的な設備をもつことが出来た。」

「松島の柿葺落し興行は五十三日間の大入り当り振舞の大成功であった。」

とあり、文楽座にとって、この松島文楽座の開場はいかに重要な出来事であったかが窺われる。その後文楽座は地の利の良い、御霊神社内に移転するが、この松島文楽座の跡地は「松島八千代座」と呼ばれる、小芝居（大芝居に対して格下の芝居をいう）の歌舞伎などを上演する劇場となった。

この八千代座に関する逸話として、七代竹本住太夫は初めて「妹背山婦女庭訓」の山の段の大判事を勤めた際に、稽古をした二代野澤喜左衛門に「お前のは松島の大判事や」と叱られたという話は、ここで上演されていた二流三流の芝居のような芸だということを言っている。それほど明治生まれの人達にとって、松島にあったこの劇場が身近に親しまれていたことを表しているといえよう。

また実業家の松下幸之助は八千代座の前で見合いをしたなどという話も残っている。松島文楽座時代の様子は、『道八芸談』や『文五郎芸談』の書籍に詳しい。

「現在の西区松島千代崎橋周辺」

＊御霊文楽座

明治１７年１月、非文楽系の人々を集めて、かつて文楽軒の芝居のあった博労町稲荷社内の北門東側に彦六座を旗揚げし、のちに豊澤團平ら一部の幹部座員が文楽座から引き抜かれ、これに加わった。

それに対抗するため、家督を子の大助に譲り（明治１５年）文楽翁と名乗っていた大蔵は、御霊神社内にあった土田の席と塩鯛の席を買収し、明治１７年の９月に小屋を新築して、地の利の悪い松島から文楽座を移転させたのが、御霊文楽座の始まりである。距離の近い文楽座と彦六座の競合は、明治期の人形浄瑠璃の黄金時代をもたらした。

大蔵（文楽翁）が明治２０年２月１５日に７５歳で没すると、大助（文楽軒・霞亭）が経営を引き継いだが、明治２３年２月２８日に４９歳で没。子の泰蔵（大助と先妻との間の子）が座主となり、大助の後妻はる（通称おえい）と経営にあたり、竹本摂津大掾(だいじょう)を中心とした人形浄瑠璃文楽座の全盛時代を迎え、「輝ける明治文楽」を築きあげるが、他の事業に失敗し（大助が生前に煎茶道に傾倒したためとの説あり）、その余波を受けた経営不振から明治４２年３月２０日に文楽座を松竹合名会社に譲り渡した。泰蔵は、その後の大正４年６月１１日に４６歳で没している。

一方、彦六座はやがて経営不振のため明治２６年に解散し、その後非文楽の人々は稲荷座や明楽座、堀江座、近松座、京都の竹豊座などと小屋を変えながら、大正時代まで文楽座に対抗したが、ついにはその拠点を失い、人形浄瑠璃界は文楽座一強となった。

文楽が人形浄瑠璃の代名詞のように使われるようになったのはこれ以降のことである。

植村家から経営を引き継いだ松竹も、設備の改良や興行時間の変更などの改革を実施し、いったんは観客を劇場に呼び戻したが、大正期の後半にはまた不入りが続き、苦しい経営を迫られる中、大正１５年（1926）に失火により、御霊文楽座は全焼した。

御霊文楽座については、現在の人形浄瑠璃文楽座の座員の師匠に当たる世代の人の中には、この劇場に出演していた人が多数いて、「御霊さん」時代の思い出話を聞いている人も多い。

御霊文楽座跡

＊四ツ橋文楽座

御霊文楽座が大正１５年に火災により焼失して以後、道頓堀の弁天座で仮興行を続けていたが、昭和５年（1930）１月、松竹は四ツ橋近辺の佐野屋橋南詰にあった旧近松座を買収して

その地に四ツ橋文楽座を開場した。新劇場は近代的な洋風建築であり客席数はすべて椅子席の８５０席、この収容数は御霊文楽座の全盛期を想定したものだった。興行形態も見直し、今までの「通し」方式を取りやめ、「見取り」方式（有名狂言の見所ばかりを集めた興行形態）に切り替えた。人気のある名人上手達が活躍し、戦前の文楽黄金期を迎えた。しかし、この劇場も昭和２０年３月１４日の大阪大空襲で焼失した。終戦を迎えるといちはやく再建され翌２１年２月には復興記念興行が行われた。その後組合問題から、劇団としての文楽座は因会と三和会の二派に分裂し、松竹傘下の因会はこの劇場を本拠地に、三和会は地方巡業を主に、１５年間にわたり、別れて興行を行うこととなった。その間の昭和３１年に道頓堀へ移転のため閉場した。現座員の長老の中には、この再建された四ツ橋文楽座に出演経験のある者も複数いる。

「四ツ橋文楽座のあった西心斎橋一丁目周辺」

＊道頓堀文楽座のち朝日座

四ツ橋文楽座の老朽化のため、昭和３１年１２月２８日、戦災で焼失していた弁天座の跡地（もともとは豊竹座が所在していた場所）に座席数１０００席、鉄筋三階建ての近代劇場・道頓堀文楽座が開場し、人形浄瑠璃が本格的に道頓堀に復帰した。その後松竹が文楽の経営を手放し、昭和３８年５月に分裂していた因会と三和会が合同して、財団法人「文楽協会」が設立された。三か月後の８月に、道頓堀文楽座は朝日座と改称し、劇場名としての「文楽座」は姿を消した。現在、文楽座の名称は劇団名「人形浄瑠璃文楽座」として残っている。

この劇場は花道を有してはいたが、人形浄瑠璃のために、舞台の船底や電動で出入する床など特殊な設備を有し、朝日座と改称後も文楽の本拠地として文楽協会主催の定期公演に使用され、文楽協会事務局も劇場内に置かれていた。

昭和５９年に国立文楽劇場が設立されると、文楽の本拠地としての機能は文楽劇場に移り、朝日座は取り壊された。

現座員８４名のうち３５名がこの劇場に出演経験があり、非常に懐かしい劇場である。

「朝日座のあった道頓堀東側」

＊国立文楽劇場

国立文楽劇場は、移転した大阪市立高津小学校の跡地である大阪府大阪市中央区日本橋一丁目にあり、関西政財界の働きかけにより４番目の国立劇場として昭和５９年に開場、大小２つの劇場と展示室などからなる。建築家黒川紀章氏の設計で鉄骨鉄筋コンクリート構造 地下２階・地上５階。座席数７５３席（出語り床設置時７３１席、小ホールは１５９席）。

独立行政法人日本芸術文化振興会により運営されている。現在、大阪での公演はこの劇場で開催されている。

「日本橋一丁目にある国立文楽劇場正面」

＊文楽座の現在

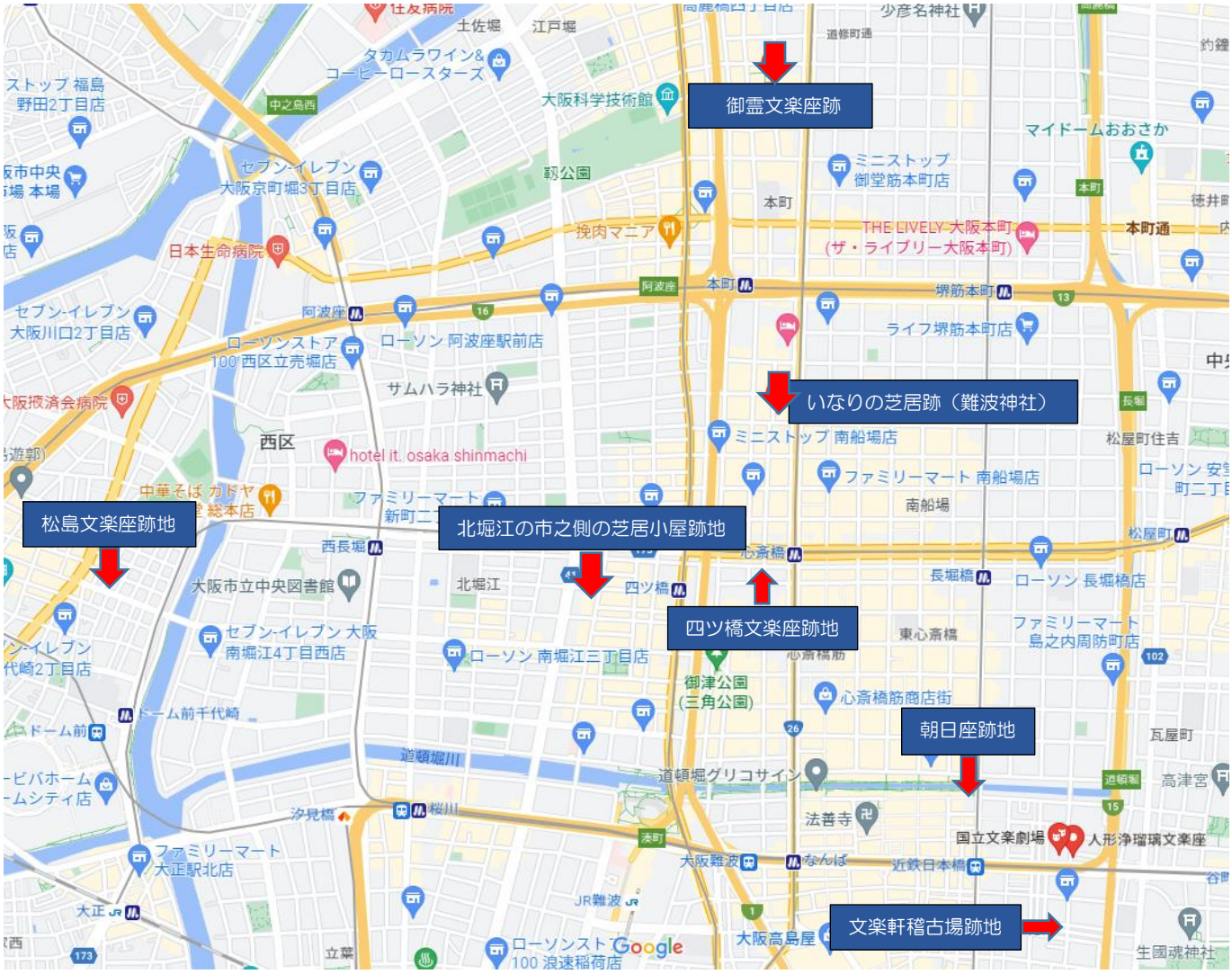
劇場名としての「文楽座」は、道頓堀文楽座の朝日座改称と同時に無くなったが、現在も劇団名として「文楽座」は存在している。

昭和４０年４月には、座員の福利厚生のための団体として、任意団体の「人形浄瑠璃文楽座」が発足し、平成２８年（2016）１１月に座員全員が所属する、「一般社団法人人形浄瑠璃文楽座」となり、現在に至る。

現在、文楽座座員は、公益財団法人「文楽協会」と契約し技芸員として、文楽協会主催の地方公演等と、独立行政法人日本芸術文化振興会が行う、大阪・国立文楽劇場と東京・国立劇場小劇場で定期的に開催されている公演に出演している。

人形浄瑠璃文楽座の座員により演ぜられる「文楽」は 昭和３０年に文化財保護法に基づく重要無形文化財に指定されている。また、平成１５年にユネスコ「人類の口承及び無形遺産に関する傑作の宣言」、平成２０年「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」への掲載、そしてユネスコ無形文化遺産保護条約が発効した平成２１年９月の第１回登録であらためてユネスコの無形文化遺産にも登録された。

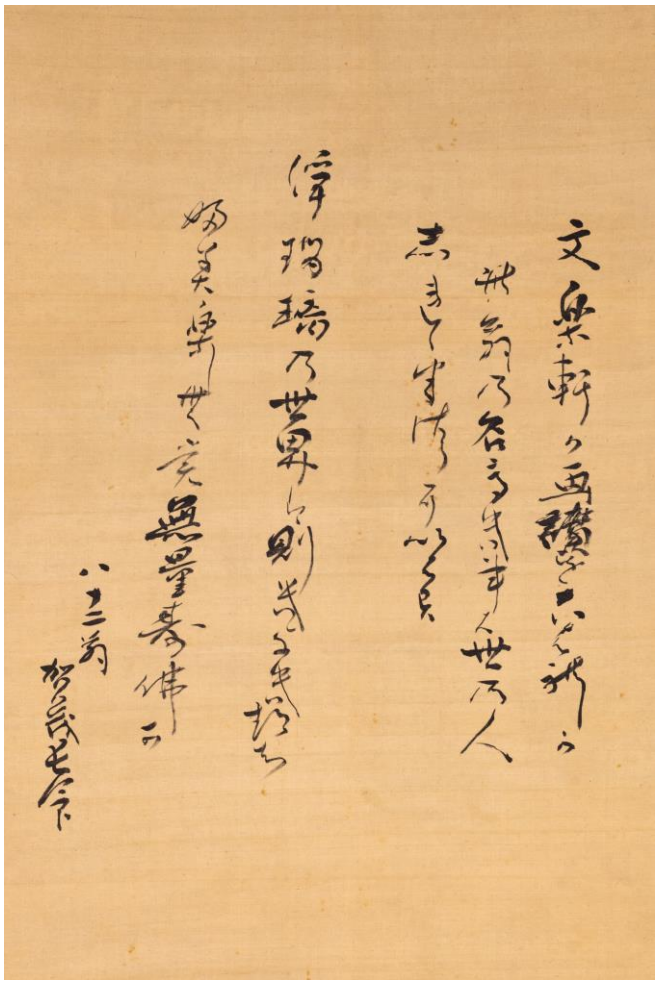
【アクセスマップ】



引用元：Google 社「Google マップ、Google Earth」
https://www.google.com/intl/ja/permissions/geoguidelines/

資料篇

初代文楽軒の肖像画



初代文楽軒の肖像画（賛）

この肖像画は『義太夫年表　明治篇』にも紹介されている、植村家の子孫である植村定治郎氏（※）旧蔵の品である。賛は、賀茂長命（季鷹）【宝暦４年～天保１２年（1754～1841）】により書かれている。

賛に書かれている彼の年齢から推定して、この画は初代文楽軒の二十七回忌の前後に描かれたものと思われる。

※植村定治郎（ていじろう）【1908～1974】農芸化学者　東京大学応用微生物研究所所長　岩手大学学長

文楽軒か画賛を乞はれしか
（が）　　（が）

此翁の名高き事は世の人

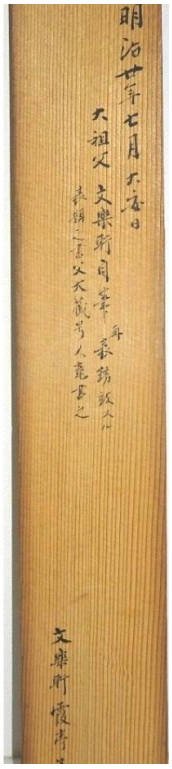
しれゝは　　さらにいはす
（知れれば）（更にいはず）

浄瑠璃の世界は則　　きよきつち
（則ち）（※浄土のこと）

ふみ楽しむも　　無量寿佛か
（※文楽の名に掛けている）（阿弥陀如来のこと）

八十二翁
賀茂長命

初代文楽軒自筆歌



軸箱・箱書き

この書は、初代文楽軒の自筆と伝えられるもので、署名は「文樂」とある。掛軸に貼付されている四代目座主の植村大蔵（文楽翁）自筆の題箋には『祖父文樂軒自筆哥』とある。また、掛軸の箱には五代目座主の植村大助により、表面に『先祖文樂軒哥』、裏面に『明治廿年七月大安日　大祖父文樂軒自筆　再表錺致スル　表題之書父大蔵号人竜書之　文樂軒霞亭生』と書かれている。内容は、妻か恋人を残して旅に出る前の心情を書いたもののように思われるが、詳細は不明である。
（一部破損の箇所があり、また読みについても不確かな箇所もあるが、一つの説としてここに示す）

余り／＼　なごりをしさ　いとまごひに　我心底　のこすかたみと　心もそゞろに　手もふるへど　そもじの
（余り余り　名残惜しさ　暇乞いに　我が心底 残す形見と　心もそぞろに　手も震えど　そもじの）
心も　たしかに　まよひなきよふと　ねがふのみ
（心も　確かに　迷い無きようと　願うのみ）

いにしへの　いかなる神のむすびにて　おもふまゝなる　末のたのしさ

つまの身に　なりて我身をわす（破損）まよひなければ　外心なし
（ほかごころ）
世の中にたのしきものもをゝけれど　我にまされる人わあらしな

誠にかなしみわ　一かこんと　しばしのわかれもつらけれど　これしもそもじと　あんらくにさせたく二人の（破損）
（誠に悲しみは　一禍根と　しばしの別れも辛けれど　これしもそもじと　安楽にさせたく　二人の）

末々の為とおもへば　つらきたびゆき（破損）　又目出度帰りて　恋しきかをゝ見るを（破損）
（末々の為と思えば　辛き　旅行き　又めでたく帰りて　恋しき顔を　見るを）

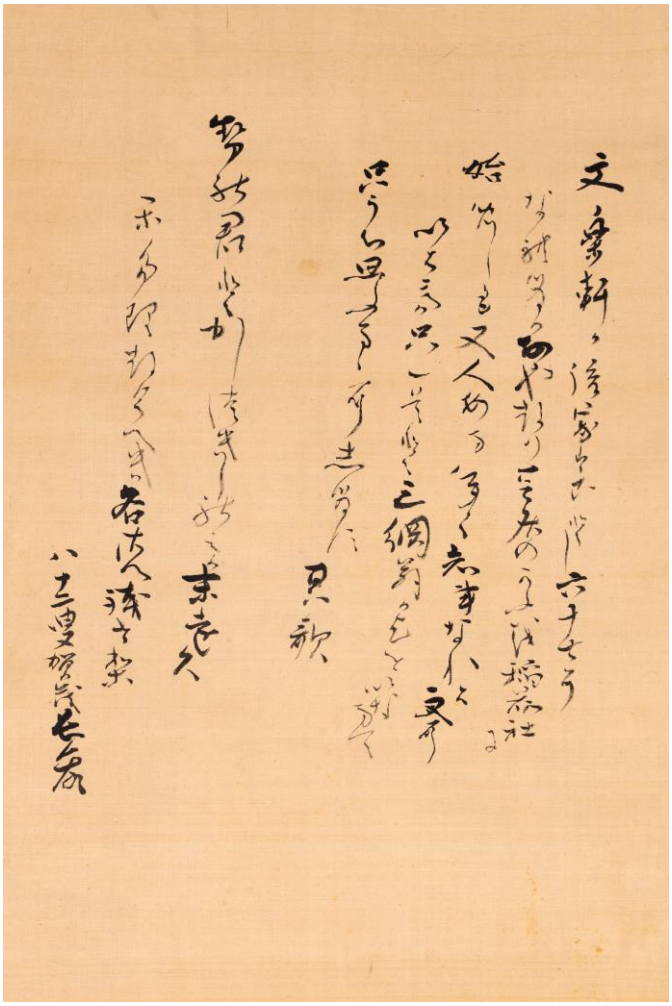
はやく帰りて　一所にくらす為に　もうけるたからと　わき目ふらず　せい出し帰りて　これにまされる
（早く帰りて　一所に暮らす為に　儲ける宝と　わき目ふらず　精出し帰りて　これに勝れる）

心底あらじと　あだに御うけ有まじく候
（心底あらじと　仇に御受け有るまじく候）

ねがわくば　同じ心の糸にしにと　のこすことのは　よそにみなすな

文樂

初代文楽軒妻てる肖像画



てる肖像画（賛）

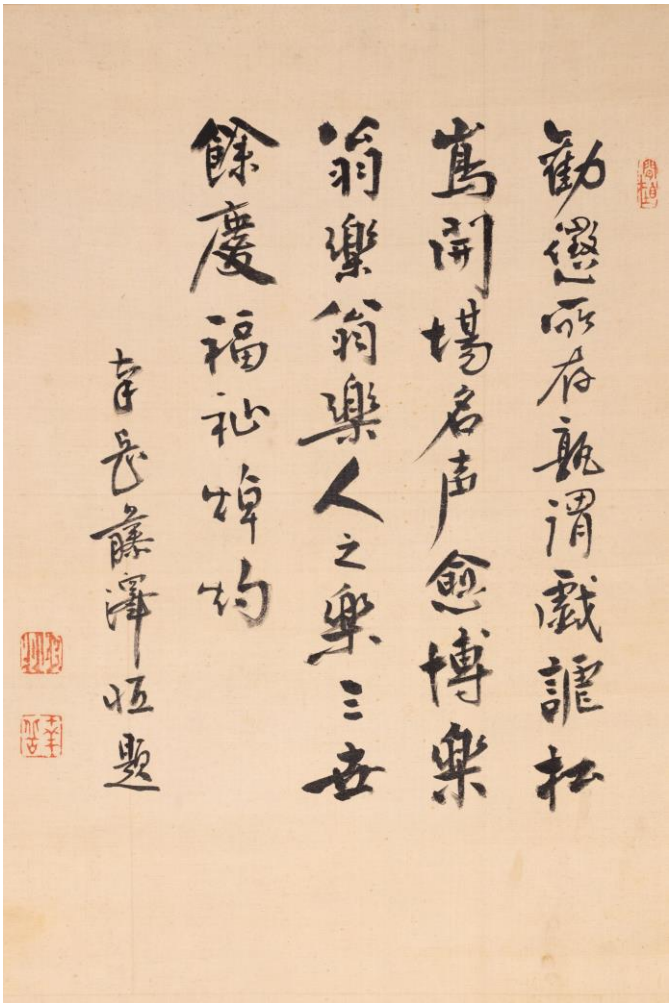
この肖像画は「てる」の生前、初代文楽軒の肖像と同時期に描かれている。植村家の子孫である植村定治郎氏旧蔵の品である。なお、本図と同一構図の「てる」の肖像画（賛は無し）が、淡路島の正井家に所蔵されているという。「てる」の生年は未詳とされているが、賛に書かれている「てる」の年齢【ことし六十七】と賀茂長命の年齢【八十二叟】から、明和６年（1796）頃の生まれと推定される。（天保１１年１２月８日没）

文楽軒か後家はことし六十七になれるか　あやつり芝居のかふを稲荷社に始めしも
（が）　（が）　（株？）

又人あまねく知事なれは　更に　いはロか　只一首と三綱翁か乞をいなまて只うち思ふまゝにしるす其歌
（知る事なれば）　（ぬが？）　※　（が乞うを否まで）

せの君とかしつきしのち末遠く　かたりつくへき名さへ残せり
（かしづきし）　（つぐべき）

八十二叟 賀茂長命
※三綱翁（三代竹本綱太夫）



文楽翁大蔵の肖像画　　文楽翁大蔵の肖像画（賛）

この肖像画は初代文楽軒のものと同じく、『義太夫年表　明治篇』にも紹介されている、植村家の子孫である植村定治郎氏旧蔵の品である。

賛は、儒学者の藤澤南岳【天保１３年～大正９年（1842～1920）】により書かれている。

箱書きには、『樂翁君肖像』とある。

勸懲所存	勸懲の存する所	（人形浄瑠璃に存在する勸善懲悪の意味は）
孰謂戲謔	孰（たれ）か戲謔と謂はんや	（誰が笑いごとだと言おう　まじめなものである）
松嵩開場	松島開場	（松島新地に文楽座が開場して）
名声愈博	名声愈（めいせいいよ）いよ博（ひろ）し	（名声はますます広まる）
樂翁樂翁	楽翁楽翁	（文楽翁よ　文楽翁よ）
樂人之樂	人の楽しむを楽しむ	（あなたは人が喜ぶことを楽しみとしている）※
三世餘慶	三世の余慶	（三代目として祖先から余慶を承け）
福祉焯灼	福祉は焯灼（しゃくしゃく）	（その幸せは　まばゆく輝く）※

南岳藤澤恒題　南岳藤澤恒題す

南岳によるこの題画の詞は、賛の文体を用いる。つまり画賛。
賛は、韻を踏む文体。この文は、四字一句、隔句押韻（一句おきに句末字を押韻する）、
韻字（謔・博・楽・灼）は入声十薬（平水韻）に属する。

※ 樂人之樂　『後漢書』馬援伝に「杜季良豪俠好義、憂人之憂、樂人之樂
（杜季良は、豪俠にして義を好み、人の憂ふるを憂ひ、人の樂しむを樂しむ）」とある。

※焯灼　　灼灼に同じ。明るく輝くさま。

＊文楽軒墓碑文（文樂先祖之碑）

　維時天保十四癸卯秋、改造舊碑也。祖父樂道、文化七庚午秋七月九日歿焉。祖母妙教、天保十一庚子冬十二月八日歿也。依之聯名而建之矣。舊碑、先淨樂翁與宗族龜井儀兵衛者共合力營之云。其先人之志、爲示子孫記之。　　三世孫正井大藏源應親敬白。

　維(こ)れ時 天保十四 癸卯(みずのとう)（一八四三）の秋、改めて旧碑を造るなり。祖父の楽道は、文化七庚午(かのえうま)（一八一〇）秋七月九日歿す。祖母妙教は、天保十一庚子(かのえね)（一八四〇）冬十二月八日歿するなり。之に依りて名を聯(つら)ねて之を建つ。旧碑は、先浄楽翁 宗族の亀井儀兵衛なる者と共に力を合はせ之を営むと云ふ。其れ先人の志、子孫に示さんが為に之を記す。
三世の孫 正井大蔵 源(みなもとの) 応親敬(つつし)んで白(まを)す。

※「先淨樂翁」の「先」は、死者に対する敬称。

（文中の亀井儀兵衛は、大坂上町へ嫁いでいた、てるの姉の嫁ぎ先という。）

＊文楽翁之碑（６ページ写真）

　この石碑は明治２２年１２月に文楽翁（大蔵）の子の大助により建立されたもので、建碑式は明治２３年８月２３日で、大助死去の直後である。
　碑文は以下。（本碑文は木谷蓬吟著「浄瑠璃研究書」から引用したが、誤字がある。原碑からの解読を試みたが、碑面の摩耗もあり不鮮明で不可能であった。一部は推測して修正し、括弧付きで示したが後考を俟ちたい。）

　吾皇國偶人劇場、而最完者、其唯文樂歟。故嘗群聚而充溢於其場。夫維新以還、吾國與萬芳（方）通信頗廣矣。故各國人亦時々觀之、而賞嘆焉。然則可謂海内之最也。夫文樂翁者、姓植村、稱大藏、阪府人。其王府（父）稱嘉兵衛、幼而善淨瑠璃語、十有三而自號文樂軒。嘗歴遊於中國、倚諸大姓招請而演之。其音調不凡、聽者莫不感賞、迺顯名於天下。其子繼焉、其技亦類於考、稱贈復與考同。嘉生翁、々繼考業、其技優於王父。蓋翁者三世而顯名於海内、故當今嚴然。其場盛昌無比、是皆翁之廣德居多矣。且翁天賦豁達大度而文雅之玄（士）。嘗云、予劇場主、何當於大方君子耶。不顯其雅於外。平素與之對、則如常人。然入其室、而觀其陳列、則脱塵、而實希有之士也。是以世人槩慕其悳。有餘暇則娯樂茶讌、或飛羽觴遣興。故三都諸大家亦無不稱翁德。明治二十年歳次丁亥二月十有五日、不幸罹病、而遊於仙都。行年七十有五。埋遺髮於遊行寺中。哲嗣大助建碑於茲。作銘曰、

　者（有）永々者　孰謂之拒（短）　有赫々者　孰謂之淺　歿而有聞　孰謂非遠　泉深上滿　望之累如　文翁之穩

　明治二十二年歳次乙丑十有二月下浣
　後學　華陽　奠陽處士小田堅撰竝書

吾が皇国の偶人劇場（人形芝居）にして、最も完き者は、其れ唯だ文楽のみか。故に嘗て群聚まりて其の場に充溢す(満ちあふれた)。夫れ維新より以還、吾が国 万芳（万方）と信を通ずる（互いに音信をやりとりする。ここでは使者を相互に派遣すると解すべき）こと頗る広し。故に各国の人も亦た時々之を観て、賞嘆す（感心して誉めたたえる）。然らば則ち海内の最（世界最高）と謂うべきなり（評価できる）。夫れ文楽翁なる者は、姓は植村、大蔵と称し、阪府の人。其の王府（王父の誤り。後文に「王父」とあるのが正しい。王父は祖父の意）は嘉兵衛と称し、幼にして浄瑠璃語を善くし、十有三にして自ら文楽軒と号す。嘗て中国を歴遊し、諸大姓（名門権勢の家）の招請に倚りて之を演ず。其の音調は凡ならず、聴く者は感賞せざる莫く（誰もが感心して誉めたたえ）、迺ち名を天下に顕す。其の子焉を継ぎ、其の技も亦た考に類し、称贈（死後の贈り名の意と思われるが、単に名称と解すべきであろう）も復た考と同じ。嘉（二代目の嘉兵衛、文樂軒）は翁（文楽翁大藏）を生み、翁は考の業を継ぎ、其の技は王父より優る。蓋し翁は三世にして名を海内に顕し、故に当今厳然たり（重きをなしている）。其の場の盛昌すること無比なるは（比べるものがないのは）、是れ皆翁の広徳 多きに居る（功績の大部分を占めている）。且つ翁は天賦の豁達の大度(天が与えた生まれつき広い度量の持ち主)にして文雅の玄（士）。嘗て云ふ、予は劇場の主にして、何ぞ大方（博大な見識を有する人）君子に当たらんや（匹敵しようか）、と。其の雅を外に顕さず。平素 之と対すれば（向き合っていると）、則ち常人の如し。然れども其の室に入りて、其の陳列（室内に列べた品々）を観れば、則ち脱塵にして（俗域から抜け出た）、実に希有（世にも稀な）の士なり。是を以て（それで）世人は概ね其の悳（徳）を慕ふ。余暇有れば則ち茶讌（茶会）を娯楽し（楽しみ）、或いは羽觴（酒杯）を飛ばして興を遣る（酒を飲んで気持ちを晴らす）。故に三都の諸大家も亦た翁の徳を称へざる無し。明治二十年歳次丁亥（一八八七）二月十有五日、不幸にして病に罹りて、仙都に遊ぶ（死去する）。行年七十有五。遺髪を遊行寺中に埋む。哲嗣の大助 碑を茲に建つ。銘を作りて曰はく、

永々たる者有り　孰か之を拒（短）と謂はん　赫々たる者有り　孰か之を浅しと謂はん　歿して聞（名声）有り　孰か遠きに非ずと謂はん　泉深くして上満つ　之を望むれば累（栗）如たり　文翁の穩※

明治二十二年歳次乙丑十有二月下浣

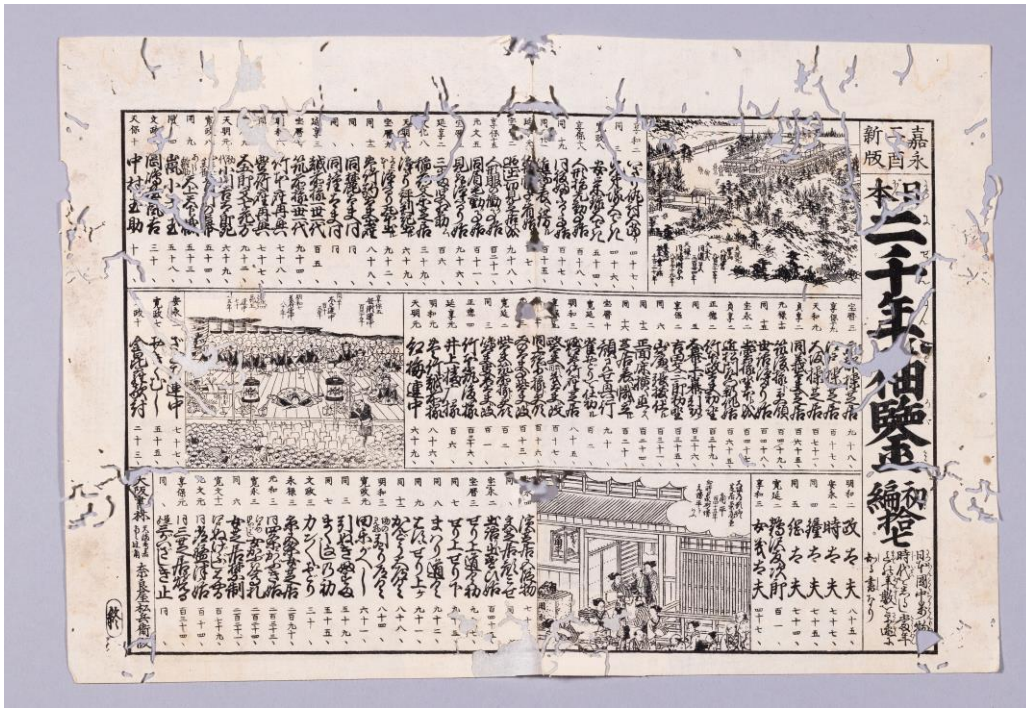
後学　華陽　奠陽処士小田堅※撰し並びに書す

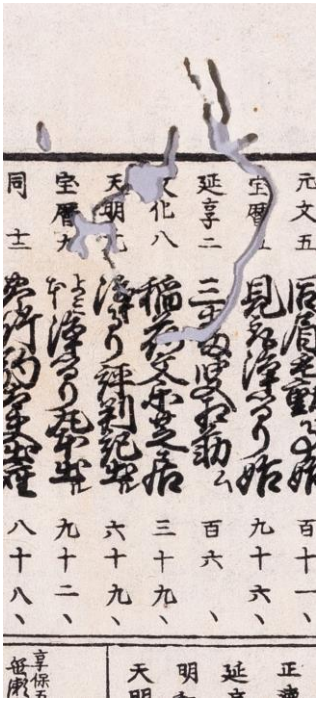
※この銘文の第一句は、第三句と対をなすので、冒頭の「者」は「有」の誤りと判断できる。一句おき遇数句末に押韻するので、第二句末の「拒」は、これ以下の淺・遠・滿・穩と韻が合わず、誤字と見なしうる。今仮に「短」と改めてみた。また二句一組みの形式をなすが、「泉深上満」の句に対応する句がなく、この前に一句の脱文があると思われる。第八句の「累如」の意味が不明で、これも誤っていよう。敬い謹む様子をいう「栗如」と推測した。第六句までは、「継承が永いからには、誰が短いと言おう。威光が盛んであるからには、誰が浅薄と言おう。死しても名声が遺れば、誰が遠大でないと言おう」という意味になろう。その後は誤字・脱文があるために解釈し難いが、「……は、泉が深くて底より上に水が満ちるようである。文楽翁を望み見て荘敬の念を覚えるのは、翁の揺るぎない重みゆえである」との意に仮に解しておく。

※小田奠陽は、幕末・明治の大阪の漢学者。南海電鉄の創業者、松本重太郎の漢学の師。生没年未詳。

錦絵「松嶋廓大芝居人形芝居繁栄図」　芳瀧（1841～1899）画
（大阪府立中之島図書館蔵）

明治４年（1871）、松島に遊廓が設置された際、大阪府知事渡辺昇が松島繁栄策として、芝居小屋を誘致し、移転に応じた文楽翁と、道頓堀の興行師・三河屋栄吉（通称三栄）が明治５年にそれぞれ劇場を建て営業を開始した。本図左側に歌舞伎を上演する「三河座大芝居」、右側には「文楽座浄るり人形芝居」が描かれている。





日本二千年袖鑒（初編 拾七）

以下の方々のご協力を受けました。
謹んで御礼を申し上げます。（敬称略）

国立劇場
国立文楽劇場
文楽協会
櫻井弘
渕田裕介
黒石陽子
正井良治
天野光
久堀裕朗
前田憲司
芳村弘道
芝田純平
吉原写場
円成院
長久寺
淡路市教育委員会
大阪府立中之島図書館

義太夫年表編纂会
『義太夫年表　明治篇』（昭和３１年　義太夫年表刊行会）
戸伏太兵
『文楽と淡路人形座』（昭和３１年　寧楽書房）
木谷蓬吟
『浄瑠璃研究書』（昭和１６年　第一書房）
井野辺潔、黒井乙也
『染太夫一代記』（昭和４８年　青蛙選書）
倉田喜弘
『文楽の歴史』（平成２５年　岩波書店）
法月敏彦
『岩波講座　歌舞伎・文楽』第九巻（平成１０年　岩波書店）
竹本長門太夫
『増補浄瑠璃大系図』（平成５～８年　日本芸術文化振興会）
正井克己
『むかしばなしひがしうら』（平成１４年　東浦町老人クラブ連合会）

〈編集後記〉

近年、「文楽」の名称やその使われ方に様々な課題が生じてきており、文楽座から何らかの発信をしたいと考えておりました。

文楽座の劇団としての発祥はもっと古いのですが、そのきっかけ作りとして、番付に「文楽座」の文字が現れた時を「文楽座命名１５０年」と位置づけ、企画展示やこの冊子の発行、法要などの記念イベントを通じて、皆さまにもっと文楽座を知っていただきたいと思っております。

代々の文楽軒や植村家のことを調べれば調べるほど諸説があり、不明なことばかりであるということが今回の調査でわかりました。ですから現在わかっていることをできる限り全て網羅し、紹介するように心がけましたが、なにぶん学者でもない素人の編纂したものですので、まだまだ調査不足の点、誤った解釈なども多々あると思います。新出資料の公開等、後考を俟つこととしたく存じます。（R）

追記

昨年当冊子を配布いたしましたところ、ご好評をいただき増刷することとなりました。

これを機に、数カ所の改訂を行い、また中国文学がご専門の芳村弘道立命館大学特任教授より頂戴した、「文楽軒墓」及び「文楽翁之碑」の碑文の読み下し文と訓釈を追加させていただき、第３版といたしました。ご厚意に心より御礼申し上げます。

令和４年２月　　初版発行
令和４年４月　　第２版発行
令和５年２月　　第３版発行

一般社団法人　人形浄瑠璃文楽座編